

早稲田の古典籍 ここだけの話（1）

松下 真也（図書館蔵古典籍データベース化推進プロジェクト室）

早稲田大学図書館でここ数年力を注いできた古典籍総合データベースの作成も、文学・歴史といった主要な分野がほぼおわり、山を越えた感じがする。アクセス数も昨年と比べ倍増しており、世に好評をもって迎えられているようだ。

ところで、「古典籍」（こてんせき）という言葉は、皮肉なことに、実は古い日本語にも漢語にもなかった新しい言葉である。「大言海」にも「日本国語大辞典」にも載っていない。「広辞苑」にも載せられていなかったが、2008年に出た第6版によりやく採録された。これは早稲田のデータベースの影響……と言いたいところだが、もちろんそうではない。反町茂雄（1901-1991）という人が書いた、『日本の古典籍 その面白さ その尊さ』（八木書店、1984）という本によって、あるいは、国立国会図書館に「古典籍課」という名称の課ができたことによって、しだいに定着した言葉と考えるべきであろう。

反町茂雄氏は、弘文荘（こうぶんそう）という伝説の古書肆の主で、戦前から、おびただしい数の古典籍資料にかかわってきた人である。

早稲田が誇る貴重な古典籍資料の一つに、吉田兼好の『つれづれ草』の古写本がある。室町時代の「古今伝授」の継承者、東常縁（1401-1494）の自筆写本と伝わるものである。これはかつて、故村井順氏の所蔵していたものであり、村井氏はこの写本を「兼好初稿本にもっとも近いもの」と位置づけている。ただし遺憾なことに「上巻」のみであった。同じ本の下巻は、海外の収集家の所有に帰しているという。

1988年ごろ、その『つれづれ草常縁本』の下巻が、「クリスティーズ」の古書オークションに出品されるという情報もたらされた。これは早稲田で落札しなければならない。私はぜひ出張したいと思ったが、都合がつかず、海外に支店をもつM書店の人に代行を依頼した。

ところがそのオークションに、反町茂雄氏が行くという噂がつたわってきた。著書にもあるよう

に、これまで、海外流出した幾多の貴重な古書を買ってもどしてきた辣腕の氏のことであるから、むしろ『つれづれ草』なんか見逃すまい。一抹の不安をおぼえた私は反町さんに直接電話をかけた。

早稲田の図書館ですがというと、

「はいはい、お世話になっております」

と愛想がいいので、私は、

「こんどのオークションに、徒然草常縁本の下巻が出るようですが、あれは早稲田に上巻があるものですので、そこのところをお含みいただければ」といった。本来オークションというものは自由なはずで、誰が何に入札しようがかまわない建前だから、あんまり強く「入れないで」とはいえない。あとで早稲田が圧力かけてきたなどと言われても片腹いたい。ということで微妙な言い回しになったわけだが、これに対する反町氏の返答に、私は耳を疑った。

「は、もしもし？ あのう、わたくし、老人でございまして、ちょっと耳が遠くて……」

このとき、反町さんは80歳代後半だったから、まあ本当に聞こえなかったのかもしれないが、うまくとぼけられた。代行を立てたせいもあり、早稲田は『つれづれ草』常縁本の下巻を落札できなかった。落札したのは、やはり反町氏であった。役者が何十枚も上であったというしかない。

『つれづれ草』常縁本の上下合体はならなかったが、一つの古書が早稲田大学図書館の貴重書庫におさまるまでには、信じられないような数奇な経緯をたどる場合が多い。昔、いったん早稲田に寄贈されかけながら、その後行方不明となり、数十年後、関係者が死に絶えた後に、ひょっこり早稲田に入るものもある。古典籍総合データベースの公開により、それらの資料が世界のどこからでもいつでもアクセスできるようになったということは、画期的な意味のあることなのである。